

## トーマス・ヒルシュホーンの《バタイユ・モニュメント》に組み込まれた暴力性について

藤本 流位 (立命館大学)

---

トーマス・ヒルシュホーン (Thomas Hirschhorn, 1957-) は 2002 年にカッセルで開催された国際芸術祭「ドクメンタ 11」のなかで《バタイユ・モニュメント》(2002) という作品を発表した。同作品は、クレア・ビショップによる論考「敵対と関係性の美学」(2004)において、国際芸術祭という観客向けに整えられた環境の中で、社会から排斥されがちなマイノリティの存在を顕在化し、彼らを観客と直接的に衝突させる場を構築するものだと考察されている。それはヒルシュホーン作品の解釈に重要な示唆を与えるものであるが、ビショップの議論は「参加型アート」をめぐる他の論客との論争に目が向けられがちで、ヒルシュホーン自身による作品の位置づけや彼の言説についての詳細な検討は十分になされていない。そこで本発表では、ヒルシュホーンが作品の中で採用しているテキストや公共空間でのインスタレーション作品の制作に関する独自の概念「現前と生産 (presence and production)」を検討することによって、現代の社会構造に潜む「暴力」が作品の中にいかに組み込まれているかを明らかにする。

まず、1990 年代以降の「参加型アート」の議論の文脈のなかでヒルシュホーン作品がどのように位置付けられてきたかを確認する。ヒルシュホーン作品は、社会的あるいは経済的な格差に基づいた関係性における緊張感や気まずさに満ちた空間を構築するもので、「参加型アート」における「敵対性」の代表事例に挙げられている。それはニコラ・ブリオーの『関係性の美学』(1998)への批判として論じられる一方、「参加型アート」に分類される「ソーシャリー・エンゲージド・アート」との比較では、倫理的観点から批判を受けている。このように、肯定的にも否定的にもヒルシュホーン作品は「参加型アート」の一つの争点となってきたが、彼自身は「真の参加とは思考における参加」であり、「参加型アート」において観客がただその場にいるだけの存在として消費されていると批判した。そして、この「思考における参加」を定義するのが彼の「現前と生産」という概念である。

ここからヒルシュホーンが作品内で意図的に緊張関係をつくり出すのは、観客に「思考における参加」を促すためであると考えられる。バタイユの暴力論を婉曲に参照する《バタイユ・モニュメント》では、社会のマイノリティに向けられる排除の暴力が、観客に対して向けられるように構築され、観客はその場で発生する不安感によって思考を駆り立てられる。このように、ヒルシュホーン作品が複雑なやり方で表象する「暴力性」とは、観客を思考させ続けるためのものであると言えよう。